

## 海外で躍進を続ける期待のガラス作家

佐々木類は武蔵野美大でガラスを学んだ後すぐに渡米し、4年間さらに本格的にガラスにかかわり、芸術センスを磨いてきた作家だ。帰国後も活動のエリアはアメリカを中心に北欧などヨーロッパにも広がり、海外の招聘制度やコンペティション等での受賞も数多い。その点においてこの作家を“新人”と位置づけていいものかどうかいささか迷うところはある。その彼女が先ごろのグループ展「美の予感」(日本橋高島屋・3月)に出品した作品「植物の記憶」は、その着想や表現手法の独創性において注目すべきものだった。しかしここで紹介するのは最新作としてのガラスのインスタレーションだ。コーニングガラス美術館が同館の収蔵を前提として毎年世界から一人だけ選んで与える権威ある大賞Rakow Commissionに日本の佐々木類が選ばれたのだ。新作のテーマは「天気」。北陸独特の陽の光の存在と自身との関わりを象徴的に可視化する観念的な作品。しかし実作では、4メートル大の四角い空間に200本を超えるガラスの雫が天上から流れ落ち、闇の中で妖しく光る。3月28日から同館で一般公開されている。期待される実力作家だ。



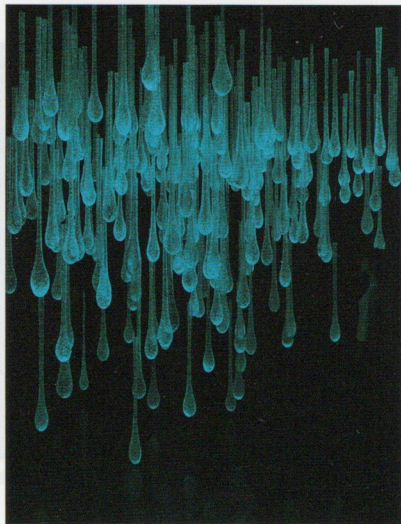
佐々木類

ささき・るい



1984年生まれ、埼玉県出身。山羊座、O型。ロードアイランドスクールオブデザインガラス科修士課程修了。Rakow Commission 2018 (アメリカ)、Young Glass 2017 (デンマーク)にて受賞。現在金沢卯辰山工芸工房専門員。目標とするアーティストはロニ・ホーン。

●New Glass Now (5月12日～2020年1月5日・米コーニングガラス美術館) / 個展 (仮) (8月1日～25日、9月27日～10月14日・Lights Gallery)



「Liquid Sunshine / I am a Pluviophile」  
2019年 Blown glass with phosphorescent material, broad-spectrum UV lights, motion detector.  
H340×W370×D419cm コーニングガラス美術館蔵  
33rd Rakow Commission, Photo by Yasushi Ichikawa.  
Courtesy of The Corning Museum of Glass.

推薦者

武田厚

美術評論家